

エドモンド王の伝説と木に纏わるシンボル

今 関 雅 夫

1. はじめに

太古から人々は、樹木、草木、葉、花に対し、畏怖の念をもって接してきた。しばしば樹木は、宇宙樹（世界樹、生命の樹と呼ばれることもある）という概念があるように、超自然的な不思議な力を持つものとされ、信仰の対象となることも多くあった。一方、草木、葉、花も薬用として用いられ、快復というその当時としては奇跡的とも思えるようなことを起こすものとして考えられていた。「木の葉」である leaf に宿る力から、leaf を語幹として様々な言葉が生まれたことについては『"The Last Leaf"の'Leaf'をめぐる』(帝京女子短期大学紀要 15 号) 等で触れたが、ということは、その葉がついている木にも同様、あるいはそれ以上に強い力が宿っていると人々が考えていたことも頷ける。ケルト族の僧侶であるドルイド（ドルイド自体、tree と密接な関係があることばである）も、木、特にナナカマド (rowan) やオーク (oak) の木には、非常に強い神秘的な力があると考えていた。現代でも、運のよい話や自慢話をした後でたたりを払うまじないとして、木製のものをたたく (to knock on wood) とか、周りの人に気付かれないようにテーブルの下に手を入れそっとテーブルの裏側や脚をさわる (to touch wood) 人がいるが、この過去から延々と受け継がれてきたまじない、迷信は、木やその木が生い茂る森に宿る神の神秘的な力（霊）を乞うという動作の現れである。また、非常に小さなどんぐりが成長し大きな強いオークの木になり、その生命が長年にわたって続くということにあやかって、どんぐりを長寿と幸運をもたらす魔除け、お守りとして首からぶら下げる人もいる。(to wear an acorn) 注1)

エドモンド王の伝説と木に纏わるシンボル

聖書にも木の生命力への言及が散見されるが、以下もそのひとつである。

14:7 "But there is hope for a tree:

If it is cut down, it will sprout again,

and its new shoots will not fail.

14:8 Although its roots may grow old in the ground

and its stump begins to die in the soil,

14:9 at the scent of water it will flourish and put forth shoots like a new plant.

「木には望みがある。たとえ切られても、また芽を出し、その若枝は絶えることがない。たとい、その根が地中で老い、その根株が土の中で枯れても、水分に出会えると芽をふき、苗木のように枝を出す。」(旧約聖書ヨブ記第14章7～9節)

この小論では、西暦870年頃にイースト・アングリアで起きたエドモンド王とデイン人との戦いを、木の語源やシンボルの面からみていき、当時の人々の木に対する思いを考察しようというものである。また、木に纏わる迷信や逸話・伝説は多々あるが、木は、様々なものの接点になっており、そこに魔界が生じうる可能性があるのではないか、ということも合わせて考察していきたい。

2. 870年 エドモンド王 (St. Edmund) の最期---橋と木の伝説の誕生

イギリス南東部のサフォーク州 (Suffolk) の町の一つに ホクスン(Hoxne)という町がある。8, 9世紀におけるヴァイキングのイングランド攻撃は、8世紀は主にノルウェーから、9世紀はデンマークからの攻撃であった。その中で、865年にイースト・アングリアに上陸したデイン人の大軍は、867年にはヨークを占領し、869年までにイースト・アングリアに戻り、その地を征服し、あと残すはウェセックスだけとした。

『アングロ・サクソン年代記』には次のように述べられている。

A.D. 870. This year the army rode over Mercia into East-Anglia, and there fixed their winter-quarters at Thetford. And in the winter King Edmund fought with them; but the Danes gained the victory, and slew the king; whereupon they overran all that land, and destroyed all the monasteries to which they came. The names

of the leaders who slew the king were Hingwar and Hubba. (現代語訳は <http://sunsite.berkeley.edu/OMACL/Anglo/> より)

『年代記』には、イースト・アングリアのエドモンド王の最期は上記の通り、デイン人が勝利し、王を殺害したとだけしか書いていない。熾烈な戦いのすえ、デイン人に斬殺されたと思われるが、これにはさらに 10 世紀の伝記作者アボー・オヴ・フルーリィが詳細に語る「ことの成り行き」があり、それが伝説として残っている。(Abbo of Fleury: The Martyrdom of St. Edmund, King of East Anglia, 870) 注 2)

Of all the happenings on the county river Waveney, the strangest and most famous was the murder of East Anglia's patron saint, the great king Edmund, at Hoxne (pronounced Hoxon) in the ninth century. The teenage King Edmund was a humble believer who strove to secure peace for his people. He courageously faced up to the Danes, refusing to forsake his faith. He gave himself up to his enemies under the hope of saving his people by this sacrifice. The Danes, votaries of Ullr, first scourged him with rods and then, binding him to a tree, shot arrows at him and finally cut off his head. Legend tells how a wolf guarded the head for three weeks until it was duly interred. A burial chapel marked the place of his martyrdom for thirty-three years (the cabalistic number of sorrow) until the translation of the saint to Bury St Edmunds and the monastery and cathedral there. 注 3)

キリスト教を棄て、異教に改宗すべきことを強要してきたデイン人に対し、国の平和を守ることに最大限の努力をしてきた敬虔なキリスト教徒であるエドモンド王は、勇敢に敵に立ち向かい、信仰を曲げることはなかった。自分が犠牲になることで民が助かるだろうと願いつつ、自分の身を敵に委ねた。デイン人は彼を鞭で何回も打ちつけた。さらに、オークの木に縛りつけ、矢をつぎつぎと放ち、最後は首をはねた。言い伝えによると、一匹の狼が王の頭を 3 週間守ったということである。

エドモンド王の伝説と木に纏わるシンボル

言い伝えはこれだけではなく、さらに、王の死の直前をかなり詳細に述べている言い伝えもある。Alfred Tennyson の曾孫である Julian Tennyson (1915-1945) がこの町を訪れた時、村の古老が Reverend Dyson というある聖職者から聞いた話として伝えたことを書き留めたもので、後に出版した *Suffolk Scene in 1939* の中で明らかにしているものである。それによると、王はデイン人に見つからないように橋の下に隠れていた、ということである。

The tradition is that Edmund, after his defeat by the Danes, took flight, and sought shelter under Goldbrook Bridge at Hoxne, where he would have been safe until his pursuers had passed by had it not been for a wedding party, who, while crossing the bridge, had their attention attracted to the fugitive by the glitter of his golden spurs. They betrayed him to the Danes, and as he was being led away by his captors he pronounced a curse on every couple who should ever cross the bridge on their way to the altar.

この箇所を描写すると次のようになるであろう。デイン人に襲いかかれたエドモンド王は命からがら逃げてゴールドブルック橋の下に隠れる。ちょうどその時、近くの教会で結婚式をあげた新婚夫婦が出てくる。デイン勢はエドモンド王を追いかけてきたが、突然王の姿がどこを見渡しても見当たらない。そこで教会から出てきた式を挙げたばかりの新婚ほやほやの夫婦に「この辺りでエドモンド王の姿を見なかったかね」と問い掛ける。新婚夫婦は、王の金色に輝く拍車が目に入り、自分たちの国王を裏切って、「あそこの橋の下に隠れています」と言ってしまう。エドモンド王は非業の最期を遂げる前に「余が命を落としたこの橋の上を渡る新婚夫婦の全てに代々にわたって呪いをかけよう」と言う。その後処刑場へと連れて行かれるわけであるが、それからというもの、Hoxneにあるこの橋は、何回もかけ替えられて今日も残っているが、新婚夫婦は誰一人としてこの橋を渡らない。これはあくまでも伝説であるが、このようにして伝説から迷信が生まれ、橋というものを渡るときにはよいが、新婚夫婦になったばかりのときには渡らない、といったひとつのタブーが生じてきたのである。^{注4)}



現在の Goldbrook Bridge。この橋の下で、Edmund 王は追ってくるデイン人が通り過ぎるのを待っていた。しかし、結局、自分の国の民に告げ口され命を奪われることになった。
(筆者撮影)



エドモンド王が橋の下に隠れている場面を描写する彫り物。
(village hall)



オークの木に縛り付けられ、無数の矢を放たれて亡くなったといわれる。この記念碑はそのオークの木が1843年に朽ちた場所といわれる所に建てられた。
The tree referred to, known as St Edmund's Oak, was, according to tradition, the one to which the king was bound when he was shot to death with arrows by the Danes. 注5)

3. 木に纏わる語源

エドモンド王の伝説の場面で現れる「橋」や「オークの木」は一体何を象徴して使われたのであろうか。この答を探すため、まず、木 (tree, wood)、オーク (oak)、橋 (bridge)を初めとして、板 (board)、梁 (beam)、境界 (border)など木に関する語や木から生じた語に関し、語源辞書やシンボル辞典等で調べ、木に関する様々なことばの関連性についてみていく。

語源を探る前に、それぞれの語の古英語(OE)における語形と意味をみる。
(Henry Sweet: *The Student's Dictionary of Anglo-Saxon*)^{注6)}

tree < OE tréow < Anglian tré(o) = n. tree; forest, wood; wood (material); gal-lows, the cross

wood < OE wi(o)du, wudu = m. wood, forest; timber, wood; ship (in poetry)

board < OE bord = n. board, plank; table; shield (in poetry); framework, side of ship

beam < OE béam = m. tree; the Cross; pillar (of fire); beam; ship (in poetry)

bridge < OE brycg = f. bridge

木ではないが現代英語 truth の古英語における語形が tree と同じであることを次に記す。

truth < OE tréow = f. truth, faith; fidelity, loyalty; grace, favour; engagement, agreement; trust, belief

また、中英語に遡れる border については古英語の bord (現代英語 board) との関連性が認められている。^{注7)}

border < ME bordure < MF < OF border < Germanic bort; akin to OE bord = border

以上見てきたことから以下のことがわかる。

- ・ tree の古英語形 tréow には、「木、森、材木」の他に、「絞首刑用木柰」「はりつけ台、十字架」の意があるということ。
- ・ wood の古英語形 wudu には、その時代の舟は全て木で作られていたということから、「舟、船」の意があるということ。
- ・ board の古英語形 bord には、「板、テーブル、(韻文で)盾」の他に、「柰組、

船べり（舷とも言い、船首と船尾を結んでいる両側面の丸みを帯びている左右対称の部分）」の意があるということ。

- ・ beam の古英語形 *béam* には、「木、十字架、火柱、光線」の他に、「(韻文で) 船」の意があること。

このように「木」に纏わる言葉は、「木」以外に、木から作られる「船」「絞首刑台（十字架）」「テーブル」といったような意味を持つことがわかった。

また、*tree* と *truth (true)* の源が同じであるということは、「葉」と同様、「木（特に *oak*）」を媒介にした行為から「真実、信念、忠誠、恩寵、約束、信頼、信ずること」などの意味が生まれたと考えられる。

次にいくつかの語源辞書やシンボル辞典を参考に上記の語について調べる。

3. 1. *tree* の語源

tree - O.E. *treo, treow* "tree" (also "wood"), from P.Gmc. **trewan*, from I.E. **deru-/*doru-* "oak." Importance of the oak in mythology is reflected in the recurring use of words for "oak" to mean "tree" (cf. Sansk. *dru*, Rus. *drevo*). In O.E. and M.E., also "thing made of wood," especially the cross of the Crucifixion and a gallows (cf. Tyburn tree, gallows mentioned 12c. at Tyburn, at junction of Oxford Street and Edgware Road, place of public execution for Middlesex until 1783). Sense in family tree first attested 1706; verb meaning "to chase up a tree" is from 1700. Tree-hugger, contemptuous for "environmentalist" is from late 1980s. ^{注8)}

druid との関連を指摘している語源辞典は多々あり、^{注9)} また、**deru* は「オークの木のように堅い」の *solid* を意味し、*true* や *tree* と関係があると指摘する辞典もある。^{注10)} 『イギリスの生活と文化事典』（安東伸介他編、研究社、1982、pp.896-897）によれば、シャーマン、祭司、哲学者、医師、裁判官、預言者などを兼ね備えていたドルイドは、オーク(*oak*)に生えるヤドリギ(*mistletoe*)で神聖視し、2頭の牝牛を犠牲にした後で、半円形の金の鎌で刈り取る。ヤドリギは万能薬であり、とりわけ不妊に利くとされた。ドルイドとは、ギリシャ語の「オーク」を意味する *drus* と「知る」を意味する *wid* から成り、「オークを崇拝する賢者」

エドモンド王の伝説と木に纏わるシンボル

の意である。

3.2. wood の語源

wood (n.) - O.E. wudu, earlier widu "tree, trees collectively, the substance of which trees are made," from P.Gmc. *widuz, perhaps from I.E. *weidh- "separate," in the sense of "land apart" (from what is inhabited). Wooden in the sense of "expressionless and dull" is from 1566. Woodcut first recorded 1662; woodlouse is from 1611, so called from being found in old wood. Woodpecker is from 1530; woodsy is from 1860; woodwind is first recorded 1876. Out of the woods "safe" is from 1792. 注8)

上述されているように、*weidh- (= separate) に遡れるかもしれない。この *weidh-は、英語の divide や widow を生む。森は、人が生活しているところ (known land)と切り離された場所なので、separate を意味する weidh から生まれたと考えられる。forest も outside areas (外側の場所) の意である。注3

3.3. board の語源

board - O.E. bord "a plank, flat surface," from P.Gmc. *bortham, from I.E. *bhrdho- "board," from base *bher- "to cut." A board is thinner than a plank, and generally less than 2.5 inches thick. The meaning "food" (M.E.) is a metaphoric extension of "table." Another extension is to "council (that meets at a table)." Boarder is attested from 1530. 注8)

上記に書かれているところでは、「薄い板」から「テーブル」、「テーブルに出されるもの」から「食べ物」の意が生まれた。また、「テーブルで会う」から「会議、会合」が生まれた。

board は古英語において、色々な意味があったが、そのうちの重要と思われる2つの意味は、plank と side of a ship を意味する border である。「端」edge を意味することばで現在も使われているのが seaboard (沿岸) (=edge of the sea) で

ある。^{注9)}

重要な点としては、IE*bher には cut, pierce, break の意があり、^{注10)}「カットされたところ」ということから、board の意味に、現在は廃語になってしまったが、「境界、縁、端《今は seaboard のみ》」がある。

3.4. border の語源

border - c.1350, from O.Fr. bordure "seam, edge, border," from Frankish (cf. O.E. bord "side"), from P.Gmc. *bordus "edge," from *borthaz. The geopolitical sense first attested 1535, in Scottish (replacing earlier march), from The Borders, district adjoining the boundary between England and Scotland.^{注8)}

board の項でみたように、board から border (境界) が生まれた。この意味の誕生には、先ほど触れたように、「木」から作られた「船」との関係が認められる。

ここでの board (板) は船べりの板であり、この板の下には深い海、言い換えれば、死の世界が広がっているわけで、この board 一枚が生死を分ける「境界」ということになる。board の上に乗っている限りは安全であるが、船べりを境に大きな生死の分かれ目があるということを実感していたのだと思われる。

また、board の関連語である aboard (a < on + board < 船べり) は、元来「船に乗って」を意味していたが、今では、He was already aboard the plane. と表現できるように「船」だけではなく、「飛行機、電車、バス、馬に乗って」を意味するようになった。

3.5. beam の語源

beam - O.E. beam originally "tree," but by 1000 also "post, ship's timber." Meaning of "ray of light" developed in O.E., probably because it was used by Bede to render L. columna lucis, Biblical "pillar of fire." Nautical sense of "one of the horizontal transverse timbers holding a ship together" is from 1627, hence "greatest breadth of a ship."^{注8)}

エドモンド王の伝説と木に纏わるシンボル

beam は本来 tree (木) の意味であり、現代英語の boom (帆げた) も beam から来ている。^{注9)} 木と船との関係の強さを再び感じる。

beam は IE *bheu- (= to be; to grow) にまで遡れる。「木」は「育つもの」である。^{注11)} *bheu- がギリシャ語では ph- となり、phuton は「植物、木」、phulon は「家族、族、民族」。そのギリシャ語から英語に入ったものとしては、physics (the science of matter and energy), physician, physical などが挙げられる。

3 . 6 . bridge の語源

bridge - O.E. brycge, from P.Gmc. *brugjo, from I.E. base *bhru "log, beam," hence "wooden causeway." Card game is 1880s, maybe 1843, an alteration of bir-itch, but the meaning of that is obscure.^{注8)}

bridge は「木で出来た道、構造物」の意ということで、「橋」も実は「木」と関係があるということが分かる。^{注9)} シンボル学的には、「橋」は「天と地、あの世とこの世、神と人間、生と死、現実と非現実」を結ぶものである。^{注12)} もちろん、これらを分けているのは橋ではなく、川の水である。この水がこちら岸（此岸）とあちら岸（彼岸）を分けていて、その上にかかっている橋は、「現実」から「非現実」、「生」から「死」であれ、次に至る「通過」や「変化、移り変わり」を象徴している。

また、「虹」も「天と地を結ぶ橋」と考えられている。

3 . 7 . timber の語源

timber - O.E. timber "building, structure," later "building material, trees suitable for building," and "wood in general," from P.Gmc. *temran, from I.E. *dem-/ *dom- "build" (source of Gk. domos). The O.E. verb timbran, timbrian was the chief word for "to build." The nautical slang sense is of "pieces of wood composing the frames of a ship's hull."^{注8)}

timber は元来は house の意で、材木の意はない。家の多くが木材で出来ている

ということから、やがて現在の timber の意味が生まれたと考えられる。^{注 13)}

3. 8. oak の語源

oak - O.E. ac "oak tree," from P.Gmc. *aiks, the source of the tree name in most Gmc. languages (cf. O.H.G. eih), of uncertain origin. The usual I.E. base for "oak" (*derwo-/*dreu-) has become Mod.Eng. tree. The O.N. form was eik, but there were no oaks in Iceland so the word came to be used there for "tree" in general.^{注 8)}

oak の育っていなかった地域でも oak という言葉が使われていたということから、oak はただ単に「木」の意味になったことが分かる。力、勇気、真実、人体を象徴し、雷神(thunder gods)と結びつく。逆境に耐える十字架の木、男性的な力、聖木もオークのイメージである。^{注 12)} シンボル学的な意味は次の通りである。

Oak is usually thought of as masculine, strength, protection, durability, and/or the human body. It is commonly associated with thunder gods (Thor in Norse mythology, Zeus/Jupiter in Greek/Roman myth, etc...) and thus is often symbolic of THUNDER and LIGHTNING. Christian tradition links the oak to Christ, as epitomizing his strength and resiliency. It is also connected with the CROSS, along with Holly and Aspen.^{注 14)}

堅い木から、「不死」や「忍耐」を象徴することもある。また、しばしば、稲妻に打たれることもあり、稲妻や天の神であるゼウス（ジュピター）との連想もある。オークの葉にはライオンをも立ちつかせる力があり、オークの木の燃えカスには、農作物を病気から守る力がある。^{注 15)}

オークの木がイギリスでやはりシンボリックに使われた有名な例の一つとして以下のような『チャールズ 2 世とオークの木』の話がある。^{注 16)}

The Oak tree has a long tradition in England as a symbol of life and security. For

many years the Oak tree stood as a Celtic symbol for life. The acorn was often used as a symbol of rebirth and as Christianity came to England it became a symbol of the resurrection. But it was King Charles II who proved the power of the Oak was behind the crown. In 1651, Charles II was crowned in Scotland. Later the same year, he marched 16,000 troops from Scotland to the England to claim back his crown there as well. Unfortunately, the Scots forces were defeated by English Parliamentary Forces and King Charles was forced to flee. ... Nearly 10 years later, Charles would return to England at the request of the English Parliament to take his rightful place as King of England. On May 29th, on the eve of his coronation, Charles created the Order of the Royal Oak, a knighthood celebrating the protection the Oak had provided the crown in its time of need. As the King was newly returned, the symbol of the acorn, or rebirth, was used for the knightly order to symbolize the restoration of the crown. The knighthood was bestowed upon those who had supported the king during his exile from the throne. This day is celebrated as Royal Oak Day.



英国王チャールズ2世がクロムウェル軍から逃れて、1本のオークの木陰に隠れたことから、オークは加護と安全と力の象徴とされるようになり、「ロイヤル・オーク」と呼ばれるようになった。また、現在の Royal Oak は当時の木のどんぐりから生まれ育ったものと言われている。注17)

3.9. truthの語源

truth - O.E. triewð (W.Saxon), treowð (Mercian) "faithfulness," from triewe, tre-

owe "faithful". Sense of "something that is true" is first recorded c.1378. Meaning "accuracy, correctness" is from 1570. 注8)

truth、true は IE の *dru- (= tree)に辿れるが、オークの木の「堅実さ、しっかりしている様」からだろうと述べる辞典もある。注9)

つまり、木（オークの木）から、「真実、信念、忠誠、恩寵、約束、信頼、信ずること」の true や truth, trust が生まれ、durable, duration, during, endure が生まれ、tray, trig, trim も生まれた。注10)

４．シンボルからみたエドモンド王の最期

木は、大地にしっかりと根を下ろし、幹は天に向かって育つ様から、天と地の間にあって、その二つを結ぶものと考えられていた。そして、そこには木の神ともいえるようなものが存在していると考えられていた。このことは、日本語でも木霊（あるいは樹神）は「コダマ」と言われ、木に魂や神がいると考えられていたことに通ずる。エドモンド王は後に聖人として祀り上げられるが、それを暗示するかのようにオークの木に縛り付けられて命を落とした。まるで、キリストの十字架での処刑を連想させる。

また、その木が切り倒され、木の生命を失ったにも拘らず、船べりや橋として使われる時、そこにも魔界が生じるようである。この場合は、天と地の間ではないが、船べりでは現実的な「生」と「死」、橋では「現世」と「来世」（橋の場合も換言すれば「生」と「死」であるが）の間に位置し、その人の行く末が悲劇となるのか、そうでないのかは分からないが、変化があり得ることを暗示している。川と橋が交差する不思議な魔界から伝説も生まれた。

エドモンド王は正に悲劇の殉教者であり、それを象徴するために、後世になって語られる伝説の中で、橋の下に隠れるというような話が生まれたのであろう。

エドモンド王亡き後、デイン人はさらに西のウェセックスを目指し、アルフレッドと戦うことになる。アルフレッドはイギリスに元々いたゲルマン人の最期の砦を守ったということで、後になってその功績が認められることになるが、まだこの時点では王になってはおらず、ミサ中の兄王エゼルレッドを差し置いて、軍

エドモンド王の伝説と木に纏わるシンボル

を率いて出陣したということで、敬虔なキリスト教徒の観点からみると、この行動にはいささか問題あり、とされた。

エドモンド王はイースト・アングリア末期の王であり、敬虔なキリスト教徒であった故、伝説となって登場したときに、死への旅立ちとして、橋渡しの役割として「橋」や「オークの木」というものが象徴的に使われたのではないだろうか。

ここでは詳しくは触れないが、*The Bridges of Madison County* の恋物語も「出会い」と「別れ」の橋の観点から見ていっても面白いかもしれない。縁起が悪いかもしれない、へたをするとよくないかもしれない、その一線である橋を上手にクリアするというで、より大きな幸せをつかめる、そのような話を展開するため「橋」が象徴的に使われているとみることもできると思われる。

注)

- 1) 1) 木に関わる迷信の例は、Harry Collis, *101 American Superstitions* (Chicago, Passport Books, 1998)より。

Carrying the bride across the threshold

The custom of the groom carrying his bride over the threshold is believed to bring the couple good fortune. One superstition says that evil spirits trying to spoil the newlyweds' happiness might cause the bride to fall as she enters her new home, so the groom should carry her to keep her from falling. (p.19)

Wearing an acorn

Because the strong oak tree, which grows from a little acorn, lives for such a long time, it is believed that wearing an acorn as a charm will bring good luck and a long life. (p.80)

Knocking on wood

People once believed that the spirits of the gods lived in trees. So when we talk of our good fortune, we knock on wood three times to ask the spirit inside the wood to protect our luck and not to punish us for praising ourselves. (p.86)

- 2) <<http://www.fordham.edu/halsall/source/870abbo-edmund.html>>
- 3) <<http://www.whitedragon.org.uk/articles/archer.htm>>
- 4) <<http://ourworld.compuserve.com/homepages/suffolkscan/GaIx.htm#Hoxne>>
より。また、次のページにも同様の記述あり。
<<http://www.paranormaldatabase.com/suffolk/sufpages/fromgreat.htm>>
- 5) 2 枚の写真は次のページから
<<http://www.suffolkcam.co.uk/hoxne25052002.htm>>
- 6) Henry Sweet, *The Student's Dictionary of Anglo-Saxon* (London: Oxford University Press, 1973)
- 7) <<http://www.m-w.com/cgi-bin/dictionary>>
- 8) <<http://www.geocities.com/etymonline/>>
- 9) John Ayto, *Dictionary of Word Origins* (New York: Arcade Publishing, 1990)
- 10) Joseph T. Shipley, *The Origins of English Words* (Baltimore and London, The Johns Hopkins University Press, 1984)
- 11) Edward C. Pinkerton, *Word for Word* (Detroit, Verbatim, 1982)
- 12) 赤祖父哲二編 『英語イメージ辞典』 (東京、三省堂、1992)
- 13) Louis Heller et al, *The Private Lives of English Words* (London: Routledge & Kegan Paul, 1984)

エドモンド王の伝説と木に纏わるシンボル

- 14) <<http://www.umich.edu/~umfandsf/symbolismproject/symbolism.html/O/oak.html>>
- 15) Hans Biedermann translated by James Hulbert, *Dictionary of Symbolism* (New York, A Meridian Book, 1994)
- 16) <http://www.royal-stuarts.org/royal_oak.htm>
- 17) 図は <<http://etext.lib.virginia.edu/kinney/small/oak.htm>> より